

書 評・紹 介

Geoffrey Hawthorn (ed.), *Population and Development*,
Guildford, England, 1978, 210pp.

1974年ブカレストで開かれた国連主催世界人口会議以後「人口と開発」の問題は世の脚光を浴びるに至った。この問題は古くて新しい問題であるが、家族計画と出生力の低下の関係が必ずしも直線的方程式によって結びつくのではなく、経済社会開発という大きな枠組の中で家族計画の問題をとらえない限り、そこには限界があるということの現代的再確認でもあった。ブカレスト以後『人口と開発』とくに経済と出生力に関するシンポジウムの書物は多く出版されたが、その中でも Ronald Ridker 編の *Population and Development* と本書と全く同じ題を持つ一本があり、これはとくに米国の学者を中心として、以上の問題に対する state of the art つまり、人口と経済、とくに出生力と経済に関する研究成果がどこまで進んでいるかの道標を示している。

この Geoffrey Hawthorn の『人口と開発』という書物は、英国を中心とする人口学者、経済学者、社会学者、人類学者の間で人口と経済開発、社会開発との関係を論じた別の意味での state of the art を狙った論文集である。しかし、人口とくに出生力と経済、社会に関する論文集としては、Ridker の書物程各トピック別の網羅性が少なく、例えば低開発国における子供の価値論、子供のコスト論、婦人の労働力の問題、教育と出生力との関係を正面から扱った論文は含まれていない。ただこの本で特色は、編者が現在ケンブリッジ大学で教鞭をとる社会学者であるだけに、経済学者の外に社会学者、文化人類学者の論文を配置し、先ず経済学者にマクロ的に出生力と経済的変数とのモデルを論ぜさせるが、それと同時に各低開発地域に即して、各地域の社会構造、文化形態を考慮に入れた事例的人口・開発論を展開させたことであろう。

先ず経済的論文としては、Robert Repetto が低開発国の出生力と所得分布との関連を論じ、Robert Cassen 外はある特定の所得分布をもたらすように政策が行なわれた時出生力に及ぼす効果をシミュレーションによって分析している。又 Geoffrey McNicoll は、新古典主義のマクロ経済学のモデルが経済を人口との関連で探索する場合使われる仮定が妥当であるかどうかを論じている。

次はすでに述べたケース・スタディで、Monica Das Gupta, Nigel Crook, Vinod Jairath 及び W. M. Tilakaratne はそれぞれ南アジアの人口と開発の問題を論じている。Das Gupta の論文は三つの村落の事例で出生力と社会・経済要因との関連を論じ、Crook はモデル作成に際しての諸要因と出生力の研究に対する注文を一般的に論じている。

Alfred Ukaegbu と Meyer Fortes はそれぞれ西アフリカの問題を扱っている。Alan Macfarlane は産業革命以前の英国の事例を対象とし、英国の場合の農業構造、家族・親族構造と出生力とのユニークな関係を論じている。

出生力と経済要因との間の関係の本格的研究はせいぜい1950年後半米国で始まったにすぎず、まだまだ本当に判っていることは非常に少なく、極端に言えば未知の事ばかりである。この意味でこのような経済学と社会学の両方に触れる論文集は歓迎すべきことであり、この領域でもっと新研究が続出するのが斯界の発展のために望ましいことである。

(河野 稠果)